

京都の福祉

発行 京都府社会福祉協議会



2009

9

No.493

本紙は、共同募金の
配分金によってつくられています。

主な記事

- 1面…もえくさ
- 2・3・4・5面…シリーズ②「いのち」について考える
- 5面…「地域活動助成」のお知らせ
- 6・7面…NPO法人等活動の紹介「ポップバンド」
- 8面…夢中!・熱中!ふくしびと



笑顔いっぱいツーショット「いのち」について考える（松原のぞみの郷）

もえくさ

「福祉を国政の真ん中」と一番目に訴えた。今夏の衆院選挙にあたって、福祉分野から政治に期待するものは?と新聞社の取材を受けたときのことだ。この間「真ん中」に置かれてきたのは「財政的効率論一辺倒」で、福祉分野にも市場原理や競争原理が持ち込まれてきたが、この原理の貫徹は、人のいのちや発達、尊厳を支え・守ろうとする「福祉」になじまない、という思いから。社会保障予算「2200億円抑制」路線の下で、生活保護における高齢・母子加算廃止や介護保険制度の改正に次ぐ改正、障害者自立支援法の抜本的な見直しなどがあった。この影響で、社会福祉各分野の利用者・対象者は大きな痛手を負ってきた。政治は、人々のしあわせ（福祉）のためにこそ働いてほしい、と強く願いながら。▼二番目に訴えたことは、当事者の声・生活の実情、福祉現場の実態をシッカリと踏まえた政策を進めてほしいということ。その際、福祉人材確保の困難状況を転換し飛躍的に充実させるために、何といっても従事者の処遇改善を大きく図ってほしい。そして、複雑・困難なケースが増えている現場実践を支える専門職の十分な配置を強力に進めてほしい。そうして本来の姿として、福祉職が社会の尊敬や憧れの的になるような政策的誘導、政治的キャンペーンを打ってほしい。▼三番目には、既存の制度・施策にのらない「制度の外・制度の谷間」にある生活・福祉問題に光をあて、その基盤保障は国政がリードしてほしい。例えば、孤立しがちな「父子家庭」に対する児童扶養手当の法制化など、と三本の柱で語らせてもらった。今号が読者に届く頃には新しい政権が誕生している。どういう政権になっていようと、これらの課題には是非とも取り組んでいただけたことを願う。▼衆院選に突入する頃、8月10日未明に台風9号が兵庫県北西部を襲い大きな被害をもたらした。被災地支援のため、13日から近畿ブロックの府県・指定都市社協職員がお盆をはずんで現地支援に入った。府内市町村社協にも派遣職員を呼びかけ、直ちに伝えてもらった。また、平成16年の台風23号被災地支援に使い保管していた資機材（一輪車、スコップ等々）を、舞鶴市保管分については市社協及び舞鶴JC、舞鶴市、府中丹東保健所、福知山市保管分については市社協及び福知山市災害ボランティアネットワーク連絡会の協力を得て、14日早朝、兵庫県佐用町災害ボランティアセンターに急送し支援活動に活用してもらった。22日には、府・市災害ボランティアセンター共同で「ボランティアバス」を送り出し、103名が現地の復旧活動に従事した。皆さんの迅速な対応と御協力に感謝。改めて、犠牲になった方々の御冥福と現地の一日も早い復興をお祈りします。

介護のいまとこれからを探る

社会福祉法人カトリック京都司教区カタリス会
小規模多機能型居宅介護事業所 松原のぞみの郷
〒600-8355 京都市下京区松原通堀川西入北側来迎堂町718-1
TEL : 075-803-1726 FAX : 075-803-1736



地域であたりまえの生活を自然に 小規模多機能型施設松原のぞみの郷の取り組み

今回は、「介護のいまとこれからを探る」シリーズの3回目です。これまでの2回では、家族に介護の負担がかかってきており、制度の狭間や情報不足など様々な要因が、介護者を追い込み「孤立」を生んでいる状況が見えてきました。そして同時に、家族同士やご近所、介護者同士の「つながり」や「支え合い」が「孤立」させないために非常に重要だと分かってきました。今回は、「孤立」をさせず、さらにその人らしい介護を支えるために動き出している施設の地域密着型サービスや当事者ネットワークの取り組みを取り上げ、これからの介護に必要な視点を探ります。

●商店街にある昔ながらの町家

在宅での家族による介護。これまでその家族の負担や思いを取り上げてきました。

「住み慣れた家や街でいつまでも。」家族や本人の願いを、より身近に、より柔軟に支える施設の動きが生まれています。

その一つが、平成18年度の介護保険法改正で制度化された「小規模多機能型施設」です。その名の通り、民家に近い小規模で家庭的な形で、「訪問」「通う」「泊まり」など複数の機能を持ちます。それらを利用者や家族のニーズに沿って柔軟に組み合わせる、24時間365日の地域密着型サービスです。

その「小規模多機能型施設」が、どのように在宅介護を支えているのか、京都市下京区にある「松原のぞみの郷」取材しました。

「松原のぞみの郷」(以下、のぞみの郷)は、社会福祉法人カトリック京都司教区カタリス会が運営する施設の一つで、平成18年度にオープンしました。生活感溢れる松原商店街の中にあり、昔ながらの京町屋を

●「やじろべえ」としての存在

改築した建物で、玄関に一歩踏み入れると優しいアットホームな雰囲気溢れています。管理者の上田充子さん(表紙写真右)は、「住まっている」ということを大事にしたい。普通の家の雰囲気の中、利用されている方が居心地良く過ごせる環境を目指しています。良い環境の中だと、認知症の症状も落ち着くんですよ。」と言います。

のぞみの郷で過ごす方は平均で一日15名程です。日中の過ごし方や送り迎えの時間、宿泊などの調整は、毎日一人一人の希望や体調、家族の予定などに応じて



シリーズ② 「いのち」について考える

組み合わせていきます。上田さんは、そんなのぞみの郷の存在を「やじろべえ」のようだと語ります。「ご家族の方は、日々ご本人に対する、かわいそう、憎い、愛しい……といった気持ちに揺れながら苦しみを抱えておられます。のぞみの郷に預けてしまうと距離がとれる。家とのぞみの郷の間をご家族やご本人の気持ちが揺れながら、バランスをとっているんです。」

のぞみの郷では、本人の思いを尊重したサービスを提供するとともに、家族の悩みや苦しみに寄り添うことを大事にしています。その一つに連絡帳でのやりとりがあります。

「介護の中で本人にカッとしてしまったという相談があった時、みんな

一緒に手紙を書いたらとても感激されました。ご家族の辛さをいろんな職員が分かち合って応えるようにしています。」と上田



さん。今年の5月には、念願の家族会を立ち上げました。これまでは家族自身のストレスになるのではないかと躊躇がありました。が、実際は予想以上の反応で「待ってました！」と言う人もあったそう。今では、介護の情報提供や利用者の様子を伝えること、交流することを目的に、「交流茶話会」として2ヶ月に1回活動しています。上田さんは、「家族の元気は何よりも大事。毎回最後には話が止まらないような状況になるんですよ。みなさん、聴きたい話したいんです。」と語ります。

●地域の中でいろんな人とつながって

のぞみの郷が担当するエリアでも高齢化

が進む中、のぞみの郷は地域において介護のことを相談できる場所であり、交流の拠点でもあります。通りすがりで介護の相談にふらっと立ち寄る方、お茶を飲んで帰る方もいるそうです。「地域で孤立をさせないこと、それも私たちの役割です。ご近所の方から助けて！とSOSをもらうこともあれば、車に乗るのを嫌がる利用者にも、近所の方が一緒に声をかけてくれることも支え合いですね。」と上田さん。毎年、お祭りをのぞみの郷内で行ったり、畑の収穫物を一緒に味わったり、障害のある方との絵画教室を開いたり。「あたりまえの生活を自然に」というのぞみの郷の理念は、地域の方、家族、ボランティアなど、人と人とのつながりを大事にした実践へとつながっています。

介護者のつながりを広げる取り組み ～男性介護者全国ネットワーク～

●つながりが支えに

介護をする同じ立場の人と話せたり情報交換ができたりする機会は、情報や知識の面でも精神的な面でも大きな支えになります。7月号で取り上げた「認知症の人と家族の会」のよ

うに全国に支部がある組織や市町村単位で活動する「介護者の会」NPO法人等が作る居場所、介護者OBが現役介護者を支える活動等があります。しかし、高齢化に伴い介護をする人は増え続け、それを支える社会資源はさらに必要になっているにもかかわらず、地道な活動を続けてきた「在宅介護者の会」が組織の運営に悩みを抱えている現状があります。京都府内(京都市除く)でも、平成17年に12団体(10市町村)あ

／京都府社協

このような中、今年3月「男性介護者と支援者の全国ネットワーク(以下：男性介護ネットワーク)」が発足しました。介護する側もされる側も、誰もが安心して暮らせる社会を目指して、男性介護者の会や支援活動の交流及び情報交換の促進を図るとともに、総合的な家族介護者支援についての調査研究や政策提言を行う組織として活動を始めています。当事者の活動について、男性介

たものが、平成19年には8団体(7市町村)となり、うち一つは休会中と組織運営の難しさがみえてきます。(平成17年度・平成19年度市町村社協活動総括資料集



男性介護ネット 事務局長 津止正敏氏

護ネット事務局長を務める立命館大学産業社会学部教授津止正敏氏にお話を伺いました。

●当事者同士のつながりを広げる

当事者活動の状況について、津止氏は「今までも男性介護者の当事者組織があったが、点在化していた。また、活動のみで終わっていたり、広がらないという状況があった。OBだけになっていたり、新しい参加者が入会しない状況であった。」といいます。大学で男性介護者の研究を重ねていく中で、各地の当事者組織などから情報が集まり、全国組織の立ち上げを望む声が出てきました。「組織化というよりは、全国各地に持ち寄って交流するだけで意味がある。ここにくれば、情報が手に入る」という場をつくりたい思いで準備会を立ち上げ、2009年3月8日に会が結成されました。「参加者は、夫や息子など約160名。まさにおやじの集会になった。介護の集会で、こんなにも中高年の男性が集まることは今までなかった。」と集会の様子を振り返ります。会場からは、介護者としての思いや経験が多く語られました。



男性介護研究会の様子

す。ケアマネジャーなど、専門職の中でも男性介護者の支援の学習会を開くなどの動きもでてきました。

●自分たちの活動を再認識

全国ネットワークの立ち上げは、「今ま

7月号、8月号、9月号の連載で、私は介護における家族の負担と思いに焦点をあて、在宅介護のこれからのあり方を探ってきました。その中で、介護する側をもっと支える仕組みが必要だということが見

連載を通して見えてきたこと

人を救えるのは人しかいない

えてきました。7月号では、本当に辛くなってきた声をかけ合える仲間がいること、当事者同士のつながり、8月号では、ご近所同士の支え合い、そして9月号では、柔軟な専門職のケア、当事者同士の声をつな

ぎ発信し制度の充実を求めることの大事さが浮き彫りになりました。これらがつながりあい、介護される本人と家族にあった形で機能することが、介護を持続可能にしていく一歩となるのではないのでしょうか。

●当事者活動を社会へ発信する役割

当事者活動の組織化を通じて、津止氏は「出てきた問題を個人の問題として終わらせないことが大切」といいます。「たとえば、男性介護者の問題は、今までは大黒柱としての男性、家庭を仕切る女性という社

会構造の中で、男性が介護を担うという状況が出てきた。今までの社会で想定されていなかった実態と制度の狭間で、その人の問題を例外として扱うのではなく、社会構造の問題としてとらえるという視点が必要になってくる。」一つ一つの個別の問題を社会の問題としてとらえ直し、発信していくことの大切さが活動を通してみえてきます。私たち社協にも、今後ますます問題を見極める力、そして社会へ発信する力が求められるのではないのでしょうか。

男性介護者と支援者の全国ネットワーク

〒602-8143 京都市上京区堀川通丸太町下ル

京都社会福祉会館内

社団法人認知症のひとと家族の会気付

TEL: 075-811-8195 FAX: 075-811-8188 <http://dansei-kaigo.jp/>

平成22年度 長寿・子育て・障害者基金事業 「地域活動助成(旧地方分助成)」のお知らせ

(本年度より助成名称が変更されています)

■目的

地域で活動するボランティア団体等民間の地域の実情に即したきめ細かな事業に対し助成を行い、高齢者、障害者の在宅福祉等の推進及び社会参加の促進、子育て支援、障害者スポーツの振興を図ることを目的とします。

■助成対象事業

国内の社会福祉を振興するための事業であって、サービスの内容、ニーズの高さ等地域の実情に照らし、事業の実施が必要と認められ、新たな展開を伴い、継続性が期待できる事業のうち、次に掲げるテーマに関連する事業。

高齢者・障害者福祉基金

- テーマ①「地域の福祉・介護のネットワークの形成に関すること」
- テーマ②「緊急に充実を図る必要のある高齢者、障害者在宅福祉の推進に関すること」
- テーマ③「高齢者、障害者の社会参加の促進に関すること」
- テーマ④「民間非営利団体等による地域の福祉・介護活動に関すること」

子育て支援基金

- テーマ①「地域や家庭における子育て支援事業に関すること」
- テーマ②「青少年の非行防止・健全育成事業に関すること」
- テーマ③「児童虐待防止対策など要保護児童対策等事業に関すること」
- テーマ④「ひとり親家庭等自立支援事業に関すること」

障害者スポーツ支援基金

- テーマ①「障害者スポーツの育成・強化事業に関すること」
- テーマ②「障害者スポーツに対する意識高揚に関すること」
- テーマ③「地域におけるスポーツを通じた障害者の社会参加の促進に関すること」

地方分モデル事業助成

- 「団塊世代等による孤立した高齢者への支援事業」
- 「父親の子育て活動支援促進事業」

■助成対象事業者

社会福祉の振興に寄与する事業を行う法人又は団体（国、地方公共団体及び独立行政法人等を除く。）であって応募時点で法人又は団体が設立されており、助成事業の実施体制が整っている法人又は団体。

- ・社会福祉法人
- ・一般社団法人又は一般財団法人
- ・特定非営利活動法人
- ・地方公共団体等の出資によって設立、運営される法人又は団体
- ・その他社会福祉の振興に寄与する事業を行う法人又は団体

■助成額 1事業年度の助成額は200万円が限度

■応募期間 平成21年9月1日～平成21年10月31日まで（当日消印有効）

■応募方法

助成事業の詳細は必ず募集要領等で確認してください。募集要領、各種様式は福祉医療機構のホームページ（<http://www.wam.go.jp/>）からダウンロードすることが可能です。また、下記でもお渡ししています。

問い合わせ・申込み先

京都府社会福祉協議会 きょうと福祉パートナー事業推進チーム
〒604-0874 京都市中京区竹屋町通烏丸東入ル清水町375
TEL：075-252-6292/FAX：075-252-6312

※先駆的活動助成（旧特別分助成）は、下記にて直接問い合わせ・申込みを受けています。

独立行政法人 福祉医療機構 基金事業部基金支援課
〒105-8486 東京都港区虎ノ門4丁目3番13号 神谷町セントラルプレイス9階
TEL：03-3438-9945・9946/FAX：03-3438-
ホームページ <http://www.wam.go.jp/wam/>

同時に、介護を通して、介護者や当事者自身が自分の存在や役割を社会の中で実感できる環境が、孤立を防ぎ、いきいきと生活を送るために重要だということも見えてきました。「介護」を辛さや困難さの側面

からだけでなく様々な角度から捉え直す、これまでの取材や連載を終えての気付きです。「人を救えるのは人しかいない。」のぞみの郷の上田さんが語った言葉です。介護者

のいのちも介護される本人のいのちもどちらも尊ばれるべきものです。介護殺人や虐待など、いのちが大事にされない状況に陥らせない。そのために、地域社会の一員として、辛さや思いに寄り添い、何が課題な

のかを一緒に考え解決策を作り出す、そんな存在でありたいと強く感じました。今、私たちすべてが介護に向き合い、これからの地域生活を真正面から考えていく時期にきていけるのではないのでしょうか。

長岡京市にあるハーモニカ楽団「ポップバンド」は、メンバーは男性10人女性3人で、平均年齢は74歳。うち80歳以上の方も3名いらっしゃいます。高齢者や障害者施設、地域の集会など、お客さんに「観て、聴いて、楽しんでいただく」ことをモットーに、これまで200回以上の公演をおこなってきています。今回はバンド結成後205回目にあたる特別養護老人ホーム「天神の杜」の公演におじゃましました。

「この曲が作られた終戦直後の昭和21年、若かりし時代を過ごした私たち、あの頃を思い出すと楽しい時もありましたが苦しいこともありました。今はこうして幸せな時を過ごしています。さあ一緒に歌いましょう、曲は『み

かんの花の咲く頃』です。」司会の大島さんの曲紹介から、コンサートがスタートします。ハーモニカと大正琴のアンサンブルに、パーカッションとマラカスのリズムが観客の手拍子を誘います。声を出して一緒に歌う方、メロディーに合わせて体を左右に揺らす方、思い思いに聞く利用者さん達。「みなさんお歌がお上手ですね」「こんなに喜んでくださるのはこの方だけです。って、どこでも言っているんですけどね」とプロ顔負けの大島さんの話しに会場から笑いがかかります。取材日の公演での最終曲「佐渡おけさ」では、タンバリンやカステネットを利用者が鳴らして、会場全体での大合奏。観客との一体感は、プロのコンサート会場に負けない盛り上がり様です。45分の公演はまたたく間に拍手喝采で終了しました。

♪長岡京市老人福祉センター内の
趣味の会の一団体として在籍♪

ポップバンドの発足は10年前、老人福祉センター「竹寿苑」で、趣味のサークルと

してスタートしました。最初は幼い頃の思い出として吹いていたのが、練習を続けていくうちにメンバーを募集してバンドを組もうか、バンドを組んだら元気なうちに社会奉仕しようかと盛り上がり、近所の福祉施設を訪問したことが始まりです。

バンド名の由来は、子どもたちにも親しみやすくまた平和の象徴でもある「鳩（ポップ）」から名前を取り「ポップバンド」と命名したそうです。

♪お客さん第一主義のための努力♪

メンバーのユニホームも赤やオレンジ色の元気の出る色で揃え、演奏を見ている方々の目を楽させています。「まとめ買いをしたら一着タダにしてもらえるような品物を探します」とメンバーの安田さんの言葉

から、ボランティア団体として限られた活動費のやり繰りが垣間見えます。

またポップバンドは要望のあった日に必ず訪問しています。大きな何十人とお客さんがいる施設だろうが、小さな敬老会だろうが、どんなところからお願いにも応じています。ただし、会場までの足代も必要ですし、楽譜代やアンプなどのバンド機材も自力で運搬しなければなりません。そこで長岡京市内であれば機材を仲間の車に分乗したり、訪問施設に送迎車をお願いして会場入りするなどの工夫をしています。京都府内遠方であっても交通手段の確保ができれば公演が可能とのことでした。

このようなお客さんを大切にしている誠実な対応が、次から次へと口コミで広がり公演は200回を超えることになりました。

竹寿苑ハーモニカ同好会

ポップバンドズ



お客さんと共に つくる「コンサート」

♪お客さんの笑顔・歌声・涙に
励まされて・・・♪

200回以上も公演しているといろいろな出会いがあります。ある日「花嫁人形」



という曲を演奏した時のこと、目の前で聴いていた女性が急にはらはらと涙をこぼしたことがありました。「あれは悲しい涙だったのか、嬉しい涙だったのか、わかりません。きっと若かりし頃の記憶がよみがえったからでしょう。」思わず演奏していた安田さんもらい泣きしてしまっただけです。

また、田畑義夫の「かえり舟」を演奏した後にある女性の方は、「シベリアに抑留された夫が帰るのを何日も何日も舞鶴港で待って、ようやく夫に会えた時、港にこの歌が流れていたんです。」と今日の演奏を聞いて、60年も前のことを思い出したと涙ながらに話をされたそうです。

初めて会ったのに、曲を通じて、それぞれの人生の場面を共有できる・・・これもメンバーが活動が続けていく大きな原動力になっています。

♪もはやタレント?!

また、こんな嬉しいこともありました。ある特別支援学校で演奏後に子どもたちが作ったダンボールの金メダルを首にかけてもらったこと。またある高齢者施設では演奏後に楽器をまとめて帰ろうと玄関口に向かうと、なんと入所者の方々が玄関ホールですらりとお見送りをされたこと。一人ひ



りと握手を交わして、まるでタレントになったような気分で、メンバーにとって忘れられない思い出になっているそうです。

♪夢はみんなで演奏を続けること♪

メンバーはそれぞれ定年退職するまで別々の職場で必死に働き、第2の人生でポップバンドと出会いました。そこから更に新しい出会いが広がり多くの方と知り合う機会に恵まれることとなりました。「このバンドに出会えたことが幸せだと思っ」と渡邊

さんが言えば「ここは学歴・職歴関係なし、みんなお互い一緒、同じレベルでなんでも気軽に話ができるんです」と安田さん。「だって、ファミリーみたいなもんだから」と井伊さんが頷きます。メンバーの結束は固く、「全員が健康で元気に公演を続けられること」が将来の夢と言います。

「ポップポポバンド」は、今後も演奏活動を続けて、新たな出会いをたくさんつくっていくことができると思います。メンバーの皆様の健康をお祈りし、ますますのご活躍を期待しています。

夢中!・熱中!ふくしびと

～だから続けたい この仕事～

福祉の現場で働く人たちの熱い想い・メッセージを伝える新コーナーです。京都府内で「熱い福祉」を「夢中」で実践している方々にスポットをあてて、元気や楽しさ、やりがいを「生」の声でお届けします。

子ども達の笑顔に支えられて

こども心理療育施設

るんびに学園

久田 美香子さん

私がこの仕事を始めた特別なきっかけはありません。ただ高校生の頃から漠然と子どもと関わる仕事がしたいと思っていました。大学で福祉を学び、いくつかの施設に見学や実習に行かせてもらううちに、児童施設で

働くということに魅力を感じるようになりまし。子どもと一緒に生活し、その心に寄り添う中で、私自身も子どもと共に成長していきたい。そう思い、児童施設で働こうと考えるようになりまし。ところが、大学卒業当時は京都府内

で4年ほど別の仕事をしながら、児童施設の職員募集を探しました。ようやく今の職場での採用が決まった時は、本当に嬉しかったことを覚えています。実際に児童施設で働いてみて、この仕事がとても難しく、奥が深いものだということを感じました。今までうまくいかず落ち込んだり、一人で泣いたりすることも何度かありました。そんな時に私を支えてくれたのは、上司や同僚、そしてやはり子ども達の笑顔でした。

の児童施設の職員募集がほとんどなく、また人気の高い職種のために狭き門となり、すぐにはこの仕事に就くことができませんでした。大学を出

この仕事を始めて今年で5年目を迎えますが、まだまだ悩んだり迷ったりすることばかりです。嬉しいこと、楽しいことよりも辛いこと、しんどいことの方が多いように感じます。それでも子ども達と過ごす日々が私にとって、とても大切なものだから、この仕事を続けているのだと思います。今年の3月、学園を退所する子どもから手紙をもらいました。その中の一文に「先生には叱られた時もあつたけど、今は感謝しています。本当にありがとうございます。」と書いてありました。この仕事の醍醐味を感じた瞬間でした。

これからもきつと辛い時はあると思いますが、子ども達の笑顔に支えられながら、毎日を過ごしていくのだと思います。その中で子ども達の心を感じる力を養い、少しでも児童施設職員として、人として、成長していきたいと思ひます。

施設名 こども心理療育施設
るんびに学園
氏名 久田 美香子
職種 生活指導員
経験年数 4年4ヶ月
●好きな言葉…
「ありがとう」
「ごめんなさい」
日常生活の中で、きちんと



使えるように意識している言葉です。
●夢中になっていること…
ペットのうさぎと遊ぶこと（遊ぶというか、触ると嫌がるので眺めている感じ）

京都の福祉 毎月1日発行 昭和36年7月26日 第3種郵便物認可

発行所 京都府社会福祉協議会
発行人 森 育 寿
〒604-0874 京都市中京区竹屋町通烏丸東入る清水町375
TEL 075-252-6291 FAX 075-252-6310
URL <http://www.kyoshakyo.or.jp>

「京都の福祉」へのご意見、ご感想、とりあげてほしいテーマなどをお寄せ下さい。表紙の写真も募集中です。(テーマ「笑顔」)

本会へのご意見等は、左記URLの「お問合せフォーム」を通じてお寄せください。

